

# コミュニティデザインの学びと人材育成

——2015年度社会デザイン学会年次大会パネルディスカッションに寄せて——

矢野峰生

## The Learning Community Design and Human Resource Development

——Notes & Summing up the Panel Discussion Annual Meeting 2015 Autumn Japan Society of Social Design Studies——

Mineo YANO

### 1. はじめに

多様な価値観が交錯する現代社会において、真の成熟社会を構築することに寄与するコミュニティデザインの学びに期待が寄せられている。観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科は、その期待に応えられる学びを提供できているのであろうか、そして、どの方向に向けて教育内容の充実を目指すべきなのであろうか。

筆者は、コミュニティデザイン学科での学びを通じた人材育成とは何か、今後充実を図るべく、どのような方向をとるべきなのかを問うシンポジウム<sup>(1)</sup>に、社会デザイン学会から参加する御誘いを頂いた。関係者の皆様のおかげで、シンポジウムで交わされた議論は、深みを持ち、多くの有意義な「気づき」を頂くことができた<sup>(2)</sup>。

この度、紀要編集委員会からシンポジウムでの議論を反映した原稿の作成を依頼された。この機会を契機に、コミュニティデザイン学科での学び、人材育成等に関する事実や所感等を整理する。今後のコミュニティデザイン学科の教育研究の発展に寄与することを望む、ささやかな試みが本稿の作成であることを御理解願いたい。

### 2. 「伝統」と「革新」

「新時代に後れをとらぬ女子の教育こそ教育家として努力すべき道である」と学祖跡見花蹊の遺した言葉を、現在まで継承し、新たな時代を担う自律し自立した女性を社会に送り出してきた跡見学園の伝統は、昭和40年度に文学部国文学科、美学美術史学科の二学科で開学した跡見学園女子大学に引き継がれてきた。

次いで、昭和42年度に英文学科、昭和49年度に文化学科が増設され、昭和から平成へと世の中が変わると、本学は「第二の開学」を迎えた。少子高齢化の進展、全入時代に対応した大学教育の見直しに迫られるなど、大学のありかたそのものを問われる時代が到来したためである。

古き伝統の尊重から、新たな時代の要請に応える大学への改革を迫られたことに対応して、本学は、平成14年度に文学部のみ単科大学から、マネジメント学部設置による二学部三学科の総合大学へと変貌を遂げた。以後、学科再編と新設を経て、平成27年度には観光コミュニティ学部の設置に伴うコミュニティデザイン学科が設立され、三学部八学科となった。

以上の経緯は、新時代に後れを取らぬ女子教育を実践していた本学が、伝統のなかに継承された知恵と経験を活かしながら、新時代の要請に応える女子教育を実践してきた証左となっている。明治8年、学祖跡見花蹊が神田中猿楽町に跡見学校を開学して以来140周年を迎えた平成27年4月、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科は誕生したのである<sup>(3)</sup>。

### 3. コミュニティデザインの可能性

「コミュニティ」とは、「人と人とのつながり」であると簡潔に説明することは、コミュニティデザイン学科教員間

でのコンセンサスとなっている。「人と人とのつながり」は、共感を伴う者同士が会話し、共に行動できることから、孤独感から解放され、自分を支え、理解してくれる他者を得られる。これは人の心に励ましと光をもたらす得る。

コミュニティデザインには、多様な定義があると思えるが、例えば、人と人がつながりながら、知恵を出し合っ  
て地域が抱える課題を解決し、暮らしやすい仕組みを作ることとしよう。具体的には、高齢者へのサポート、子育て  
支援、商店街の活性化などである。そこには、生活者の視点を活かし、多くの人や企業をつなぎ、協業することなど  
で得られる新たな暮らしの創造がある。

コミュニティデザインに注目が集まる理由の一つに、それが社会問題化した事象に対して「人と人をつなぐこと」  
で解決を図ることにある。例えば、首都圏集中型の定住人口が進む中、過疎化した地域に、地域住民のつながりに拠  
る地域活性化が生じることや食品製造工程のブラックボックス化に対し、消費者のつながりで食の安全を監視する仕  
組みができることなどである。

一方で、SNSの発達も見逃せない。しかし、コミュニティデザインによる活動は、SNSの広範な普及以前にもみ  
られるので、SNSがコミュニティデザインの可能性を高め、進化させる役割を担っていると捉えたい。

社会デザインという、より広範な視野で、コミュニティ、制度、文化を捉えたアプローチとコミュニティデザイン  
との関連性も看過できない。ひとり親世帯における子供の貧困をはじめとする新たな貧困や、固定観念による排除に  
関わる新たな社会問題等が生じてきている。社会や文化の流れが非常に大きな変革を迎えているなかで、コミュニ  
ティデザインは、時代のうねりによって新たに生じた、糸の絡み合ったような複雑な課題を解決できる貴重な手法と  
捉えられる。ところが、このようなコミュニティデザインへの注目の高まりに対して、コミュニティデザインを対象  
とする研究とそれを反映した高等教育は、全体的に見て、僅少で端緒な状況である。

コミュニティデザイン学科では、以上の社会的要請に応えうるコミュニティデザイン力を「行政と地域住民の橋渡  
しをする力」「地元を面白く元気にする力」「女性の感性と視点を活かす力」とする。行政や公共の立場から地域住民  
と協働して地域づくりのための様々な事業を推進する方法、地域社会と密着したビジネスモデルを創出し、コミュニ  
ティを活性化させる方法、女性の柔軟な感性と視点を活かしたコミュニティを創造し、地域に根ざした社会貢献の方  
法(跡見学園女子大学 2015:36)を本学科生に学んで頂けるように配慮されている。

#### 4. リベラルアーツ

『跡見学園女子大学50年史』では、観光コミュニティ学部の設立について「新しい事業の創造を「デザイン」と考え、  
観光とコミュニティの両面から地域を活性化させることができる「デザイン能力」をもった女性の育成をめざして新  
設する」とあり、観光立国日本に対応でき、地域コミュニティの活性化に寄与できる女性を育成する課題を同学部が  
担っているとある。(大学五十年史編集委員会 2015a:154) 同じく、コミュニティデザイン学科の目的について「住  
民らの協力で地元をもっと元気に発展させていくことを可能にする能力＝「コミュニティデザイン能力」は「発見す  
る力」「提案する力」「つなぐ力」を必須の三要素と考え、養成するためのカリキュラムを編成した」(大学五十年史  
編集委員会 2015a:155)と記述されている。

上記のように、新時代に後れをとらぬ女子の教育を継続、発展させてきた跡見学園の伝統に甘んじることなく、現  
代社会の要請に応えうる教育を拡充してきた一連の流れのなかにコミュニティデザイン学科の設置があった。それゆ  
え、コミュニティデザインの学びは、「伝統」と「革新」を併存させた女子教育に、組織的対応などによる一層の充  
実を反映させることを必要としている。その一端として注力すべきは、本学生が幅広い分野にわたる教養の修得を可  
能にする試みではないだろうか。

目標を定めて入学したものの、改めて将来を模索する必要に迫られた大学生への対応等から、リベラルアーツの重  
要性が近年一層の高まりを持ってきたことは周知のことであろう。それに対し、現在改組された文学部、マネジメン  
ト学部、観光コミュニティ学部による三学部八学科体制で提供される本学の授業カリキュラムは、とりわけ人文と社  
会分野を幅広く学べる機会を潜在させている。その機会を阻む学部や学科の壁を乗り越えるには、単位取得に関わる  
規約を改正すること以前に、各学科や個別教員による学術イベント、フィールドワーク、校外学習、ボランティア活  
動などをアナウンスした後、参加希望の本学生に対して、所属学部や学科に捉われることなく応じることである。

幅広い分野をカバーする教養の修得を重視するのは、それが修得者にコミュニティデザインの適用領域を拡大せしめると思えることによる。これを是とすれば、人文・社会科学を幅広くカバーした多様な学びを、コミュニティデザインの学びと一緒に修得することで、現代社会の抱えた課題に解決を図る適用範囲も一層広げられることになる。なぜなら、コミュニティデザインから修得した学びは、汎用性をもつものの、その適用の広狭は、コミュニティデザインを学ぶ者による幅広い分野にわたる教養の修得状況を反映するからである。

## 5. 緩やかな連携と適用分野

本学の組織力を発揮する視点からみれば、コミュニティデザイン学科は観光コミュニティ学部を構成する学科であるため、観光分野とコミュニティ分野に造詣の深い複数の教員の専門領域を横断的に繋いだ社会構造デザインに関する教育研究を核とすることが望ましい。具体的に言えば、地域の抱える課題を、観光およびコミュニティ活動の視点から考察し、解決するために必要と思われる学びを、教員間が「緩やかな連携」を伴って学部生のために用意することである。

その一方で、現実として、日常生活のなかで捉えられる課題を解決するコミュニティデザインは、観光以外にも広範な分野にわたって適用されている。コミュニティデザイン学科における学びでは、これらの分野での課題の解決を目指して果敢な取り組みをする際に必要な知力を本学科生に修得して頂けるように配慮することを求められている。

コミュニティデザイン学科では、その知力を修得するために、既に用意した学びでは足りないところを見出すべく現場に赴くことを重視している。インターンシップ、フィールドワークで現場に赴き、体験、観察すると、周到に準備しても新たに見出される事実が時としてあること、現場で何が起きているのか、事実の背後にどのような考えや慣習、制度的要因があるのか等を、身を以て体験、理解して頂くためである。本学科生には、問題意識を持ちつつ、既存の学問で培われてきた理論的枠組みに乗せた報告書を書いて頂いたり、参与観察して記録を取りながら座学と現場との行き来で事実の背後に潜んでいる要因を探ってもらったり、諸要因の因果関係を明らかにする作業等を重ねて頂くことになる。

## 6. 対象領域

人と人をつなぐコミュニケーション力や企画力、多様な意見をまとめるファシリテーション力、情報収集する調査力は、コミュニティデザインに関わる学びを通じて修得できる重要なスキルである。これらの能力を磨くことにより、異なる年代、異業種、異なる地域に属する様々な人と人を上手につなぐ成果を導きだせる。しかし、その過程では、現実に対話している相手方の言葉や行動に潜む心を読み取り、適切な判断の下で行動しなければならない難しさとも直面したりする。

また、コミュニティデザインを学ぶことで修得できる上記の能力は、地域の抱える課題を解決することに留まらない。複雑な現代社会の構造変動を理解し、コミュニティ（「人と人とのつながり」）共創と連携の視点で問題解決を図れば、現代社会の抱えた複雑な糸が絡んだような課題に対して、その適用対象を広げることができる。そこには、多様な分野に及ぶ学びの領域が広がっている。コミュニティデザイン学科で、その解決に寄与できる具体的に学びとして提示できるのは、防災、地域再生、商業活動、過疎と過密、ジェンダー、消費、NPO・NGO活動、子育て、都市計画などの分野で展開されるコミュニティデザインである。それぞれの分野においては、既存の学問体系にコミュニティデザインによる知力を付加した複眼的アプローチによる研究が展開され、それを反映した教育が実践されている。この学びの内容を、本学科教員は、分かりやすく、かつインプリケーションを持たせて提示する必要があると思える。そのため、異なる領域と複数の方向から適切にコーディネートされたコミュニティデザインの学びを、本学科教員は、自らの専門実績を活用して用意しなければならない。本学科教員は、以上のようにコーディネートした学びのパッケージを提供しながら、常に現場の動向を注視し、未開拓ながらも重要と思われる事象や注目すべき新たな事象について参与観察できる機会を提供するなど、現場からの要請に適時応えられるような学びのパッケージとすべく、継続的な修正を求められている。

## 7. ディプロマポリシー

跡身学園女子大学観光デザイン学部コミュニティデザイン学科の学びは、以下のディプロマポリシーとなって表記されている。

〈コミュニティデザイン学科ディプロマポリシー〉

- ① コミュニティの問題の所在と本質を見抜く能力を備えている。
- ② 問題を解決に導くアイデアを提案する能力を備えている。
- ③ 人と人をつなぐコミュニケーション能力、ファシリテーション能力を備えている。

ディプロマポリシーを骨子としたコミュニティデザイン学科のカリキュラムをみてみよう。二年次履修に配当された「基礎ゼミナール」では、インターンシップの履修が義務付けられている。それに加えて、専門演習、基幹科目、展開科目、特殊演習で一層の現場観察と体験、ゲストスピーカーとして招聘される実務家および専門家によるレクチャーや協働など、現場の実態を探る機会を多く提供できる内容と体制が本学で整えられている。

現場観察や体験に座学で修得した知識を照らし合わせる、取得したデータを統計学によるアプリケーションソフトで検定するなどで仮説検証を繰り返すなか、座学で学んだ内容と、現場でのファクトファインディングの過程で新たに見出された内容との間に相違を見出せれば、それは本学科生にとって一層の興味を深める機会となろう。また、その作業過程で、人と人をつなぐコミュニケーション能力、ファシリテーション能力を修得し、一層磨きをかける努力を重ねることが、本学科生に人格面での魅力をもたらし、人間的成長を促す。座学と現場との往復を繰り返して実施される仮説検証を積み重ねることで、事実の奥に見出される「何か」を探し出し、事実を規定する要因や法則性を見出す意気込みを持って頂けるように、私達教員は、コミュニティデザインを学ぶ楽しさを本学科生に提供したい。

以上の「事実を規定する要因探索」、多少気張って言えば「真理の探究」を通じて、現代社会の抱える問題の本質を見抜く能力、人と人をつなぐコミュニケーション能力、ファシリテーション能力を修得すれば、本学科生は、生涯を通じて、職場や日常生活に生じ得る課題の解決に向けて、持てる力を一層発揮できるようになる。

## 8. キャリア教育と紛争解決能力

近年、大学教育におけるキャリア教育の重要性が高まってきている。この観点から見れば、コミュニティデザインに関わる学びを修得することは、コミュニティ活動のみならず、上述のように、日常生活や仕事場で有益かつ汎用性の高い能力を発揮できることに寄与すると思える。とりわけ、企業や官公庁、団体などの「人と人をつなぎ、成果を導き出す力」(例えば、企画、調査、広報、宣伝、総務、秘書など)が求められる部署で、その力を発揮できるとコミュニティデザイン学科の専任教員は一致して考えている。ここでは、前述のようにコミュニケーション能力、ファシリテーション能力を高めることで一層の成果を得られると考えられるからである。

このように、コミュニティデザインを学ぶことで構築できるキャリアデザインは、どのような職業や職位に就きたいのかという外的キャリア以上に、どのような働き方をしたのかという仕事の質を高める内的キャリアの向上に寄与できよう。すなわち、多分野にわたる職業や職位で発揮できる汎用性の高いキャリア構築に寄与できるのではないか。

この内的キャリアの向上に寄与する働きを具体的に捉えると、それは人と人をつなぐ能力となる。コミュニケーション能力、ファシリテーション能力は、多様な意見を適切にとりまとめ、協働や連携を促す。そして、職場では、職場内のコミュニケーションが高まることで、意思疎通、信頼が高まり、働き手のモラル向上に寄与できる。

この度の社会デザイン学会年次大会への参加により、周知のことであるが、改めて個人の過ごしてきた生活体験や環境が、価値判断や行動に多大な影響をもたらす得ることを、パネラー、報告者の発表およびコメントに見出せた。たとえば、わが国で進展している首都圏への定住人口の一極集中は、首都圏と地方との交流が未熟であれば、それぞれに定住する人々の生活体験や環境の相違から、異なる価値観と行動を形作っているのかもしれない。そのなかで、インターネットやSNSの普及の今後の進展は、上記の状況に、どのような影響を与えているのであろうか。その結果、

定住人口の集中する首都圏で創生されるコミュニティと地方で創生されるコミュニティとは、どれだけの定性的な相違がみられるのであろうか。

現代社会に組み込まれた価値観の多様化を促す仕組みは、他にも複数見出せる。それらから導き出されるのは、多様性に対応したコミュニティの創生と連携ではないだろうか。その場合、コミュニティデザインに関わることを学ぶことで得られるキャリアと、そこで見据えられるデザインは、上記のコミュニティの創生と連携を創造する実務面での推進力となり得よう。

成熟社会の進展に伴って価値観の多様化が著しくなると、個々人の価値観の相違や誤解等から、「対立」は生じやすくなるかもしれない。その場合、争点などを明らかにした後、当事者を「争い」から「調和」に向かわせる（人と人をつなぐ）能力を、コミュニティデザインからの学びは高め得ると思える。コミュニティデザインに関する学びが、そうした個々人のもつ「和を尊ぶ能力」を高められるように、学びの内容を具体的に充実させていきたいと私自身は考えている。

## 9. おわりに

価値観の多様化が進展してきた現代社会では、日々の行動のなかで、時として、価値観および常識さえも異なる相手方の思考や判断を、状況に応じて許容できる複合視点による観察力と実行力で紛争解決を図ることが必要とされる。その観点から言えば、現代社会の抱える課題を「人と人をつなぐこと」で解決を図るコミュニティデザインを学ぶことの根幹には、「対立」から「調和」への移行を重視する思考が必要となる。そのために行う「和を尊ぶ」べき対話を導き出せる力も当事者に求められる。それゆえ、時には、イデオロギーや意見の異なる相手方の心の襞にも入るなどで当事者間における接点や合意に導ける骨太の交渉力を修得しなければならない。今後、コミュニティデザイン学科の教育内容を充実するためのカリキュラム改編があれば、この交渉力の修得に必要とされる実践的なスキルを高められる科目の導入を新たに図ることを一案として提示しておく。

真の成熟社会の実現に寄与する大学教育が期待されている。コミュニティという現代社会にとって重要であるが、未開拓に近い分野を対象にした研究に立脚した新たな教育が求められている。それに応えるべき研究職としての時間を頂ける私達大学教員は、多くの人達にとって、気づきにくいけれども重要と思える視点や考えを、わかりやすく、時流を踏まえた半歩先に本学生と社会に提示していく必要がある。そのために、コミュニティデザイン学科では、多様な見方や考えを自由に意見交換できる状態を確保したうえで、教員間の真摯なディスカッション、協働作業などによって、具体的な学びの内容を充実させ、構築していくよう所望する。

コミュニティデザインに関わる有意義な学びを提供できるよう心がけ、常に謙虚さを忘れずに、コミュニティデザインに関する学びを探り、提示していくことを私自身の肝に銘じたい。

## 注

- (1) 2015年度 社会デザイン学会年次大会 第10回 年次大会 統一テーマ：いまあらためて社会デザインを考える 【テーマ】コミュニティデザイン学の現状とこれからの人材育成 解題 中村陽一（社会デザイン学会副会長、立教大学教授）「コミュニティデザインの学びに期待すること」室内直美（跡見学園女子大生）「跡見学園女子大学が目指すコミュニティデザインとは」矢野峰生（跡見学園女子大学教授）コメント（ジェンダーのアプローチから）石崎裕子（跡見学園女子大学准教授）コメント（地域社会学のアプローチから）土居洋平（跡見学園女子大学教授）【パネルディスカッション】モデレーター 中村陽一（社会デザイン学会副会長、立教大学教授）パネリスト伊藤淳子（農と食女性協会代表）西阪昇（ラグビーワールドカップ2019組織委員会事務総長代理）
- (2) 北山晴一社会デザイン学会会長、中村陽一同副会長をはじめとする多くの関係者の皆様からのコメントや御指摘に感謝します。御陰様で、本稿への反映、今後の跡見学園女子大学観光デザイン学部コミュニティデザイン学科によるコミュニティデザインが目指す教育研究の方向などに有意義に寄与させて頂くことができました。
- (3) 本学の学部学科設立経緯については、大学五十年史編集委員会、2015a、『跡見学園女子大学五十年史』、跡見学園女子大学、2015、「ATOMI UNIVERSITY GUIDE BOOK 2016」を参考、引用させて頂いた。

## 文献

- 跡見学園女子大学、2015、「ATOMI UNIVERSITY GUIDE BOOK 2016」  
 大学五十年史編集委員会、2015a、『跡見学園女子大学五十年史』  
 大学五十年史編集委員会、2015b、『跡見学園女子大学五十年史 1965-2015』